



三つのミュージアム

—“ムラ”の後退と只見町インターネット・エコミュージアムの意義—

佐野 賢治（非文字資料研究センター 研究員）

基幹研究、統合情報発信班は、21世紀COEプログラム事業を継承し、只見町と連携を取りながら只見町インターネット・エコミュージアムのコンテンツの内容充実とその発信法を、①只見町の俯瞰写真 ②自然と暮らし ③只見町の屋根葺職人 ④只見町所蔵民具検索の4分野に分けて進めてきた。しかし、生業、年中行事から民具まで、実際、盛時を再現して高精細映像で撮りためた資料の活用や、ウェブ上での特別展ともいえる屋根葺職人に続く個別テーマの番組化、民具のクロス検索のシステム開発など取り組むべき課題はさまざま残されている。

その一方、豊かな自然と民俗文化を有する只見の地も少子高齢化の波に洗われ、民具を製作・使用した住民自身が収集し、整理し、記録カードに書き込む只見方式として民具学界で知られる民具の整理・記録・保存運動に従事した古老たちもその多くが鬼籍に入られた。「孫に伝える」ということがその活動のモチベーションになっていたが、その子供たちの声も村里では聞えなくなっている。このような現状の中で、われわれの目指しているインターネット・エコミュージアムのシステム開発を進める意味を再度、確認しておきたい。

“ムラ”の後退、戻る“自然”

このところ、全国的に熊やイノシシの人里への出没と人身への危害、猿や鹿による被害のニュースがテレビ・新聞を賑わしている。野猿が栽培シイタケを食べる量以上に糞糞払い、柿をもいで老人に投げつけるなど、現代版サルカニ合戦と笑ってすませる程度はすでに超えている。早川孝太郎が『猪・鹿・狸』（1926）を著した時代は、人間側が自然界に干渉、侵入し、動物たちの人間界への対抗策が話のモチーフになっていた。それ以前は、自然界に対する人間側の畏怖が、「山の神」信仰などを醸成し、「自然—カミ—人」の三者関係が緊張を含

みながらもバランスをとって持続していた。それがここに来て、自然界に人間が押し戻される状況である。「山の神」に山の幸を願い、熊との知恵比べを語った鉄砲打ち世代はすでに世を去り、腕自慢の猟友会の会員も年々数が少なくなっている。

人口減とともに、領域としてのムラが縮小している。いわゆる平成の大合併の結果、総務省によると3229市町村（1999. 4.1 現在）は1727（2010. 3.31 現在）と約半減し、行政上の村は、568から184と三分の一以上に減じた。国土交通省がまとめた過疎地域を抱える全国775市町村に対して、その管内に所在する62,273集落の状況調査（2006年）によると、65歳以上の高齢者が人口の半数以上を占める高齢化集落が7878集落（12.7%）報告されている。高齢化集落は、集落自治から生活道路の管理、冠婚葬祭まで、共同体としての機能が維持できない、いわゆる「限界集落」であり、当事者にとってはあまりに非情であり、胸を刺す言葉である。只見町の2010年の高齢化率は41.4%（国平均23.1%）、高齢化集落のライン上にある集落が5つほどある。統計上は判っていても、どこの集落が該当するのかは町の職員も言いにくい雰囲気である。廃屋の姿は寂しいし、豪雪のこの地では数年の内に倒壊にいたる。

集落の歴史はもとより人々が自然に働きかけ作り上げてきたムラ景観の変遷の検証もわれわれのプロジェクトのテーマの一つだが、今後は、ムラが元の自然に戻る過程も考慮しなければならなくなる。先日、帰宅後、「人類滅亡」という人がいなくなった後の世界の変化を50～200年単位で再現したヒストリー・チャンネルの番組をたまたま見、人が自然の生態系を乱したその後の影響の大きさに驚いた。

人の自然に対する開発の歴史を逆にトレースすることは、自然が元にかえる導きとなる。放棄された山田に、

杉苗を植えるのではなくその地の広葉樹の苗を植えることは、人ができる自然界に対するせめてもの配慮といえる。自然からの撤退法を蓄積された民俗誌から学び取り、その実践を記録することは後世に残す非文字資料となる。

只見の自然とエコミュージアム

「只見町インターネット・エコミュージアム」では、自然と人の交渉は、4分野の内の「②自然と暮らし」のコーナーで、民具を介在させ、自然—(民具)—人のコンテンツとして構成していく方針であるが、民具の製作・使用法について語れる古老が少なくなる一方で、ブナ林をはじめ、アバランチシュート(なだれ地形)、ユビソ柳の群生など世界的にも誇れる自然景観や多くの珍しい動植物の生態など、豊かな自然を只見町は眼前に示してくれている。

町では「自然首都・只見」を2007年7月27日に宣言。ふるさとを自然を改めて見直し、そのすばらしさと恵みに感謝し、次世代に継承する努力を町民にアピールし、その具体的運動としてユネスコの「エコパーク(生物圏保存地域)」認証を現在、只見町ブナセンターを活動拠点として目指している。エコパークに登録されると、原生的な自然を厳重に保護する「核心地域」、教育や学術研究で活用する「緩衝地帯」、人が生活や経済活動ができる「移行地域」の3地域に区分されて、人間と自然との共生がはかれる。この動きに連動して、町では従来の「川の歴史博物館」を、ブナを中心とした只見の自然景観を展示で再現し、「ただみ・ブナと川のミュージアム」として2009年10月3日リニューアル開館した(写真1・2・3・4)。

エコミュージアムは、1960年代にフランスのG・H・リヴィエールが提唱した住民主体の新たな地域博物館運動といえるが、日本エコミュージアム研究会(会長:大原一興横浜国立大学教授)では、2009年の総会で日本のエコミュージアムを、「地域社会の内発的・持続的な発展に寄与することを目的に、一定の地域において、住民の参加により環境と人間との関わりを探る活動としくみである」と定義、「多様な自然環境とそこにおいて成立した有形無形の生活・文化・産業の遺産や記憶・様式等を、過去・現在・未来を通じて、総合的・統合的」に対象とするものとし、地域資源を学習、調査・研究、保全・利活用する機能を前提として、「(学校)—地域を学び知り、地域をつくる担い手を育む住民の学校として、交流、教育、展示普及、(研究所)—地域のための研究所

として、専門家と共に科学性をふまえ学際的な調査・研究、(保全機関)—多様な自然や生活文化を含む地域資源の保全機関として、記憶の収集および持続的利活用」する活動を行い、それを推進するしくみとして「専門的職員を配し、地域の各分野や利用者の参加による企画運営、専門家との連携による学術的研究についての組織」を構成するものと憲章化した。

只見方式の民具保存活動から「自然首都・只見」運動まで、只見町の住民と行政当局の自然と文化に対する一体的な取り組みは、まさにエコミュージアムの理念に重なる。町では「自然首都・只見」応援基金をふるさと納税の対象とし、キータームに、「1.豊かな自然の代表である世界遺産級のブナの原生林、2.全ての生命の源である豊富な水を生み出す雪、3.まちづくりの根幹となる郷土を愛する人」を揚げ、その使途を「1.ブナを核とした、2.雪と共存する、3.次世代を担う子どもたちの教育充実」のまちづくりに関する事業に充てるとした(図1)。

地域の担い手の養成については、地域資源全てを学習対象として自然や民具学習の博学連携、町民向けの「只見学」を推進、スケールの大きな自然環境の中での生活

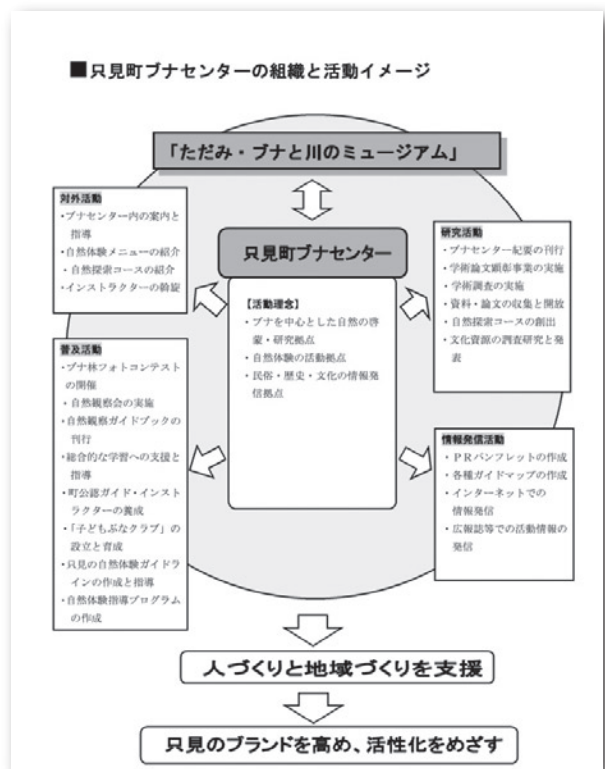


図1 只見町ブナセンターの組織と活動イメージ(只見町ブナセンター・ホームページ <http://tadami-buna.sakura.ne.jp>より)



を通した人格形成を目指すことを明言し、具体的には存続の間われる県立只見高校の継続運動に力を入れている。神奈川大学はささやかではあるが、日本常民文化研究所が「只見常民大学」を開講、非文字資料研究センターが只見町インターネット・エコミュージアムはじめ研究方面で協力し、法学部自治行政学科は只見高校からの推薦枠を設け、町づくりの人材育成に協力する協定を結んでいる。地域社会と大学の連携の一つのあり方といえる。

只見の博物館とインターネット・エコミュージアム

只見町には、「ただみ・ブナと川のミュージアム」（自然資料、上町）のほかにも、只見考古館（考古、大倉集落）、河合継之助記念館（歴史、塩沢）、叶津番所（豪農民家、叶津）など各分野にわたる博物館施設があり、ハード面、箱物としては恵まれた現況といえる。しかし、国指定有形民俗文化財も含む民具類は旧朝日町公民館（黒谷）に収蔵されているものの、民俗資料を専門に展示公開する施設は今のところない。

ここで、a〈ミュージアム〉—b〈エコミュージアム〉—c〈インターネット・エコミュージアム〉の関係を簡潔に整理してみる。それぞれの性格は要約すれば、〈施設における実物展示・保存〉—〈住民主体の地域認識・振興運動〉—〈地域情報の分析・公開・DB化〉となり、さらにその特質を強調すれば、〈展示・保存（保全機関的）〉—〈教育（学校的）〉—〈研究（研究所的）〉となる。この三者の関係は、例えば主に関わる人から見れば、aは特定できる参観者、bは地域の住民、cは不特定な多数者など、その他さまざまな視点、要素から把握することができる。

先述した、市町村合併は財政的に箱物としての複数の博物館・資料館の維持を困難にし、統廃合が検討され、民具資料に限っていえば複数の同一資料は代表的なものを残し廃棄処分の対象になるなど危機的な状況が全国各地から報告されている。従来、市町村の民具資料は多くの場合、博物館や資料館がある場合は別として、廃校舎の空き教室に収蔵されるなどして保存されてきた。それが、ここにきてその施設、民具自体の存在が脅かされてきている。いずれにしろ、先人が苦労して収集した普通の人々のくらし、常民の歴史を描くための非文字資料ともいえる民具が、展示資料や学術資料として日の目を見ることなく省みられなくなっている現状は嘆かわしい。

このような中で、只見町の民具は住民自身の手によ

て整理・記録・保存され、郷土の再認識の資料として位置づけられている。民具を製作・使用した古老の記憶は一点一点カード化され、優れた学術研究資料としてウェブ上で公開された。只見町ではa〈ミュージアム〉—b〈エコミュージアム〉—c〈インターネット・エコミュージアム〉、三者の関係の基盤整備が整ったといえる。ただし、民俗資料に関するa〈ミュージアム〉は、不十分といえ、記録カード類などが収められている旧只見中学校舎を活用しての民俗資料館建設構想の実現が期待される。旧只見中学校は、「ただみ・ブナと川のミュージアム」に隣接しており、山樵や川漁の民具の現物を、只見川を真近にして参照でき、また川漁の実際を近く of 古老からも聞け、使用可能な民具を用いての実験なども試みることができる好条件の地である。

一方、よそ者であるわれわれ研究者が関与するのは、c〈インターネット・エコミュージアム〉である。全世界と瞬時に結ばれ、大容量のデータを記憶し、検索すれば直ちに望むデータが引き出せる小さな箱物・パソコン上のインターネット・エコミュージアムは、なりは小さくても、ただ、そこに現れているものが実物ではないということを除けば、巨大な建物の博物館に引けをとらない。

インターネット・エコミュージアムの可能性はさまざまである。例えば、名人級の元山（杣）のノコギリの高精細カメラ映像を利用した使用痕の分析から、聞き書きでは判らない、カンとかコツといった民俗技術の解明の糸口が見いだせるかもしれないし、パソコンの扱いを通して祖父母と孫の世代間交流が図れる。標準・共通名称の設定が困難な民具研究において、サムネイルなどを活用して図像による検索から国際比較までその研究上の応用分野は広い。相互交流型のブログなどを通しての情報交換も有意である。何よりも、インターネット・エコミュージアムには、大面積の展示スペースや収蔵庫は不要であり、データの集積は無限といってもよく、その分類・検索機能はさまざまに工夫できる。今後、ますますムラが後退し、箱物としてのミュージアムの維持、運営が厳しくなる中で、地域の民具資料は、エコミュージアム、インターネット・エコミュージアム的視点から扱われる方向性が必要である。只見町インターネット・エコミュージアムはそのモデルづくりの試みともいえる。

地域社会における箱物としての博物館・資料館・収蔵室の運営・維持は、ムラの後退という状況の下で、今後

ますます難しくなっていく。その流れの中で、パソコンという小さな箱物を活用したインターネット・エコミュージアムの意義を只見町の例で考えてみた。言うまでもなく、実物展示や実物の収集・保存にあたる従来型のミュージアム、住民を主体とした地域認識・振興運動といえるエコミュージアムとインターネット・エコミュージアムの三者は相互補完的な関係にあり、三者の並立・協力が理想的な姿である。

庶民の生活誌の研究、生活史構築に欠かせない非文字資料としての民具は現在国内の関係するミュージアムにどれほど、収蔵され、展示されているのだろうか。単純に1000館で最低1000件でも百万件、点数にしたら

その数十倍の実物資料が収蔵されていることになる。やがては廃棄や消滅の危機にあるこれらの民具の現時点でのデータベースの作成が少なくとも早急に望まれる。エコミュージアムにしても、少子高齢化に伴う住民自体の減少と不在は運動自体を成り立たせなくしてしまう。

ムラの生産・生活活動の証となる民具のデータベース化を踏まえ、世界の諸民族、地域の民具の比較研究から人類文化の体系化を導く可能性を秘めたインターネット・エコミュージアムは、民具資料に限ってみてもその有効性が高いのである。



写真1



写真2

写真1・写真2 「ただみ・プナと川のミュージアム」の外観 すぐ近くを只見川が流れている



写真3 館内の展示パネル

水槽プールでの魚類の生態展示、ジオラマ・模型展示、昆虫標本、体験学習など展示はさまざま工夫されている



写真4 「ただみ秋の祭り展」に町民が持ち寄った毒キノコの展示